原 著

鍼灸古典手技『焼山火』による施術，局所
および経絡上の温度変化について

王 財 源* 遠 藤 宏 豊 田 住 江
河 内 明 北 出 利 勝 兵 頭 正 義

要旨 『焼山火』は中国古来より刺鍼手技のひとつとして用いられてきた補法の変法手技である。刺鍼時において、熱感や腫れぼさ覚え、虚証で冷え症の患者に古くから行われてきた。では果たして刺針時において皮膚表面温度・深部温度・血流量がどのように変化をするか、古来より伝えられてきた方法を用いて観察を行なった。今回は特に中国の老中医師に指導を賜わり研究を進め、臨床的試験の結果、皮膚温度・深部温度に上昇傾向が認められた。特に遠位部における皮膚温度と深部温度は、刺鍼後40分目には 1.0°C 以上の上昇が認められた。局所においても 0.5°C 以上の温度上昇が認められた。

I はじめに

補瀉手技は鍼灸治療を行う上での基本原則で、中国の伝統刺針手技のひとつに「焼山火」と「透天涼」がある。中国の古典である《神応経》また素問の《針解編》そして《靈枢》の九鍼十二原や《難経》にもその内容が記載され、1439年除鳳の《針灸大全》中の《金針賦》に補瀉手技として詳細に論述される。以後この《金針賦》は補瀉手技の基本論述書とされ、揚継州氏によってまとめられた。

特に「焼山火」は刺鍼部位に熱感や腫れぼったさを覚え、中国での数多くの研究報告より、体温の上昇や血糖・血漿成分への影響が述べられている。

今回は中国の報告より示唆を得て、中国の伝統手法「焼山火」のみを行い、局所ならびに遠位部の

刺鍼前後における皮膚温度と深部温度、また血流量を調査したので報告する。

II 研究方法

【対象】 大阪医科大学麻酔科ペインクリニックに通院する26歳，31歳，56歳，62歳，73歳の5名の腰痛患者に行った。

【測定装置】 テルモ社製コアテンブCTM-201・表面・深部温度モニターを使用し、血流量はアドバンス社製レーザー組織(微小循環)血流量計ALF 2100を用いた。

【測定部位】 足底中央やや前方で、第2・3中足骨間の湧泉穴相当部位と、大腿骨大転子と仙骨管裂孔を結んだ外方1/3と内方2/3の境界線で中国の環跳穴の3 cmのところに設定した。

【刺激誘発方法】 広州中医学院付属広東省中医院針灸科の劉炳権主任の指導により行なった。つまり、切皮後、少し鍼を止めてから上下に3回鍼を動かし、鍼を天部に戻して気をうかがう、得気後、天・人・地の三部に分けて提挿補法を各9回ずつ同一方向に回旋しながら行い、施術者が3回

* WANG Cai Yuan 大阪医科大学麻酔科ペインクリニック
共同研究者: Hiroshi ENDO, Sumie TOYOTA, Akira KAWACHI, Toshikatsu KITADE, Masayoshi HYODO 大阪医科大学麻酔科ペインクリニック

Key Words: 鍼刺激、中国鍼法、皮膚温度変化

呼吸するのをまって鍼を人部へ進め、再度同様な方法を繰り返してから地部まで鍼を進める。地部で同様な操作が終了したら、素早く天部まで鍼を戻して鍼体を引き倒し鍼先を経脈の流注の方向に向けて置鍼する。また抜鍼後はすみやかに鍼孔を押圧する、これが1回の操作である(Fig.1)。刺鍼誘発部位は患側部の環跳穴一穴のみで行い、60ミリ・34号のステンレス製中国鍼を使用し2分間刺激とした。

III 研究結果

刺鍼前後の局所ならびに遠隔部の皮膚表面温度と深部温度を測定した。

【局所】 無刺激群と比較すると、焼山火群の皮膚温度上昇が認められ(Table.1)、最高が20分後0.64°Cまで上昇した($P<0.05$)。深部温度では最高が40分後に0.46°Cまで上昇した($P<0.05$)。

【遠位】 無刺激群と比較すると、焼山火群の皮膚温度上昇が認められ(Table.2)、刺激直後より上昇し、40分後に1.06°Cであった($P<0.05$)。深部温度においても、刺激直後より上昇傾向を示し、40分後に1.06°Cであった($P<0.05$)。

局所および遠位部ともに皮膚温度と深部温度の上昇が認められたが、局所は遠位部ほどの高い値を示すことはなかった。

血流量(Table.3)では、局所においては意外に反

Fig. 1 焼山火誘発方法

局所皮膚温度無刺激群と焼山火群との比較

Table. 1

局所深部温度無刺激群と焼山火群との比較

Table. 2

遠隔皮膚温度無刺激群と焼山火群との比較

遠隔深部温度無刺激群と焼山火群との比較

Table. 3 無刺激群と焼山火群との血流量

応を示すことはなかったが、遠位部において若干の増加傾向を示した。

IV 考 察

中国河北医学院基礎医学研究所の董承流氏は、60例の患者に対して指先脈波計を用いて合谷穴に「焼山火」法を行ったところ、局所より末梢部に血管拡張反応が著しく認められ、表面温度の上昇や、肢体容積曲線の上昇があったことを報告している。肢体容積曲線の法則的な変化は、単に複合経穴に補瀉の手技を加える場合に発生するだけではなく、健康者や患者の特定した1穴に手技を施す際にも

現われる。しかも健康者に特にハッキリと現われ、そして大動脈の緊張度の変化に対してもその脈拍伝播速度の減速により血管緊張が下降した。これは健康者、患者の如何なる状態においても現われる変化であることを述べている。本実験においても遠位部(末梢)に特に著明な温度上昇(1.06°C)が認められ、中国の報告と同様な結果が出た。

また、上海の陸瘦燕氏も血管の収縮運動また拡張運動の他に、血管の上昇および血漿成分への影響が認められたとの報告がある。

循経感覚伝導現象の誘発実験中においても、経絡線上に沿って皮膚炎の出現や、貧血状態ならび

に一過性の体温上昇と、それに伴う部分的な発汗現象があることはよく知られている。

“気”の操作により生体内部にさまざまな反応を繰り返すことが可能な一本の鍼に要求されるのは、刺鍼時の操作技術である。

「焼山火」は提按・進退・浅深・拇指捻転時の方向と、呼吸ならび九陽六陰の配合によって行なわれ、「緊按慢提」「先浅後深」「三進一退」の技法が主流となる。《靈樞・始終編》に「專意一神、精気之分、母聞人声、以取其精、必一其神、令志在針」(鍼を刺すときは、静かなところで病人の精神状態をよく観察する。部屋を閉じて精神を統一し、人声などを聞いて心を乱すことなく、ただ一途に精神を鍼に集中しなければならない)とあり、刺鍼時の基本がここに記されている。これらによって手技の実現が導き出されるのである。また、術者の運氣も必要のために、呼吸法の訓練即ち“気”を練り上げることも、手技誘発に欠かすことができないひとつである。

『標幽賦』に「気が至るというのは、釣餌が魚に吞み込まれて浮き沈みするようなものである。気がまだ至らないとは、奥深い幽堂にいるようなものである」と刺鍼中における得気感覚が記されているが、現在のところこの得気を目安にする基準が無いために、伝統的に継承されたものを受け継ぐしかなく、今後は検討の必要がある。

以上のことより“気”によって出現した客観的な現象は、単に自律神経作用によって起こり得るとは言いがたい、1984年の第二回全国針灸針麻酔シンポジウムで、中国の孟昭威氏はその席上に於いて、鍼灸の治療効果を、第一平衡系統に神経系、第二平衡系統に植物神経系に、そして第三平衡系統を経絡とし、独自の組織で運営され、それを『整体区域全消息論』を提起し、研究がさらに進められ、新経絡循環図が完成する予定だ。現在まで多くの研究が行なわれているが、視点を変えるだけである者は神経系作用と言い、ある者は気・経絡の作用と言う。この両者の接点を導きだしたのが、孟氏の説であった。

今後、逆手技である「透天涼」法を用いて冷感や、深部温度・表面温度また血流量等の調査を行い、「焼山火」との比較検討を進めたい。

V 結 び

刺鍼刺激前後における、局所皮膚温度・深部温度と、遠位部の皮膚温度・深部温度を観察した結果、遠位部において著明な温度上昇がみとめられた。局所と比較して遠位(末梢)の温度上昇が著しいのは、中国での報告と同様な結果が出た。血流量も遠位部における血流量に増加傾向が見られただけであった。補法の変法「焼山火」と冷瀉法の変法「透天涼」は、現在多くの注目を浴びている古典手技ひとつで、われわれがよく耳にする手法であり、今後この両者の温度上昇に及ぼす影響についての比較検討を行なっていきたい。

参考文献

- 1) 陸瘦燕ほか：焼山火と透天涼の刺針手技が体温と血液成分に与える影響，上海中医薬雑誌，(9)；33.(1965)
 - 2) 董承流ほか：焼山火と透天涼が血管運動に対する作用，天津医薬雑誌，(5・6)；334.(1963)
 - 3) 北出利勝，兵頭正義ほか：明瞭な経絡現象を呈する一症例について(第一報)，全日本鍼灸学会雑誌 33(1)；50～60.(1983)
 - 4) 王 財源：子午流注の納子法が示す日時経脈流注の循環図について，東洋医学とペインクリニック Vol. 13PP；59～62.(1983)
 - 5) 鄭 魁山：臨床常用時の刺針技法の紹介，中医雑誌，(2)；13.(1963)
- (〒569 大阪府高槻市大学町2-7
大阪医大附属病院麻酔科)